

《研究ノート》

熊本市・三の嶽聖徳寺奥の院 仏神像調査報告

村上 幸奈

はじめに

熊本市西区に所在する天台宗寺院 三の嶽聖徳寺奥の院は、聖徳太子開基と伝わる寺院で、もとは法相宗であったという。境内地には石燈籠や残欠が残っており、古くから信仰の場であったことが分かる。奥の院に安置される仏神像についてはいくつかの先行研究^①が知られるものの、その制作年代等については再検討の余地があるとされてきた。

本稿では、令和七年度（二〇二五年度）に同院で実施した仏神像調査^②について報告し、簡易ではあるが所見を述べる。

一 木造観音菩薩立像 一軀

（一）概要

【法量（cm）】

総高	一二八・二	像高	九八・五
総奥	二一・七	髪際高	八七・一
頭頂―顎	二一・八	髪際―顎	一一・一
面張	九・九	面奥	一四・九
耳張	一二・五	耳朵張	一一・九

肩張	二五・四	胸奥（中央）	一五・六
胸奥（右）	一四・四	胸奥（左）	一五・八
腹奥	一八・二	臂張	二九・八
裾張	二八・二	天衣張	三一・〇
耳長（右）	八・七	耳長（左）	八・六
足先開（内）	五・二	足先開（外）	一四・七
足柄高（右）	六・七	足柄高（左）	六・七
足柄幅（右）	四・〇	足柄幅（左）	四・三
足柄奥（右）	一二・〇	足柄奥（左）	一二・三
台座高	二九・二	台座幅	三八・八
台座奥	三三・八		

【形状】観音菩薩立像。宝冠（八面。正面に定印の阿弥陀如来坐像、蓮華座、紐二条、列弁。）を被る。地髪部は正面まばら彫り、背面平彫り。耳朵環状貫通。半眼。閉口。三道相を表す。左手屈臂して腹前で蓮茎を執る。右手屈臂して第一・二・三指を捻じて接し、胸前に掲げる。条帛、天衣、腰布、裙を着ける。天衣は背面を広く覆う。正面を向いて台座上に直立する。台座は上から蓮華座、荷葉座、岩座。

【品質構造】針葉樹材（ヒノキか）。一木造。彫眼。一部彩色。像全体を一材から彫出する。内割りを施さない。木心は像前方中央に籠める。目・眉・髪は墨彩。唇は朱彩。

【保存状態】宝冠正面一部欠失。台座はすべて転用で、他像の柄穴を埋めた跡がある。

【銘記】

① 背面墨書

「奉造立肥後国□三嶽本尊」※「三嶽本尊」部は異筆か。

② 台座底面墨書

「三嶽山観音大士蓮臺新刻／文化十癸酉歲七月十日誌焉／當山現住義龍」※文化十年（一八一三）

(二) 所見

これまで本像の制作年代については平安時代後期と想定されてきた⁽³⁾が、検討の余地があるとの見解もあつた⁽⁴⁾。本調査においては、全体に硬さのある形式的な表現である点等から室町時代中期の作と推定した。

後述する脇侍不動明王(二)・毘沙門天(三)との三尊形式で祀られていることから、聖徳寺がいずれかの時期に天台宗寺院となつたことが裏付けられる。伝来についての詳細は不明だが、三の嶽聖徳寺の歴史を考える上で重要な遺品と言える。

二 木造不動明王立像(脇侍) 一軀

(一) 概要

【法量 (cm)】

総高	一〇四・四	像高	八八・三
頭頂―顎	一三・九	面張	一二・一
面奥(現状)	一五・三	耳張	一五・〇

肩張 二六・三 胸奥(右) 一七・七

腹奥 一九・三 足先開(内、現状) 八・五

台座高 一六・〇 台座幅 三六・一

台座奥 二八・一

【形状】 不動明王立像。三道相。右胸、腹の括り各一条。条帛、腰布、裙、足釦を着ける。腰を右に突き出して台座上に立つ。

【構造】 材不明。一木造。彫眼。台座、左上上膊を含む像全体を一材から彫出する。内刻りを施さない。木心は像後方中央にあり(籠めるかは不明)。

【保存状態】 朽損著しい。

(二) 所見

本尊聖観音菩薩立像の脇侍である。

面部を大きく欠損しており詳細は不明。木造毘沙門天立像(三)と一具であつたかは判断しがたい。

台座を含む一木造で内刻りを施さない構造は古風だが、同様に脇侍として安置される木造毘沙門天立像(三)と比較して体軀や衣文線が薄い。制作年代は平安時代後期から鎌倉時代と推定した。

三 木造毘沙門天立像(脇侍) 一軀

(一) 概要

【法量 (cm)】

総高	九八・八	総張(腰で計測)	二八・七
----	------	----------	------

総奥 三四・〇 頭頂—顎 一五・九
面張 一〇・八

【形状】 毘沙門天立像。着甲。兜をかぶる。開眼。閉口。裙を垂下させる。腰を左に振り、右足を前に踏み出して邪鬼の上に立つ。

【品質構造】 針葉樹材（ヒノキか）。一木造。彫眼。邪鬼を含む頭体幹部を一材から彫出する。両肩先各別材（亡失）。

【保存状態】 朽損著しい。両肩先亡失。

（二）所見

本尊聖観音菩薩立像の脇侍である。

朽損が著しく調査が困難であったため詳細は不明。台座を含む全体を一木から彫り出す構造や、素朴な面貌表現、厚みのある体軀表現等から、制作年代は平安時代中期から後期と推定した。

現在は朽損しているものの、頭部には兜を表していたと思われる、九州に残る平安時代後期の神将形像との関係も示唆される。

四 木造不動明王立像（独尊） 一軀

（一）概要

【法量（cm）】

総高	一一四・一	像高	九五・三
髪際高	八八・二	頭頂—顎	一七・〇
面長	一〇・三	面張	九・四
面奥（現状）	一三・八	耳張	一二・五

胸奥（左、条帛含） 一四・〇 臂張 三五・八

裾張（現状） 一九・五 肩当初部幅 一八・七

足先開（内） 九・三 足先開（外） 一五・一

足奥（右、現状） 九・六 足奥（左、現状） 八・一

内割り最大高 七三・八 内割り鑿幅 二・〇

右大腿部材高 二五・〇 右大腿部材幅 一一・〇

【形状】 不動明王立像。七莎髻。卷髪。左耳前から弁髪を垂らす。

右目は瞋目、左目はすがめる。右牙上出、左牙下出。水波相。三道相。左手屈臂して腹前で剣を執る。右手屈臂して腰脇で羅索を執る。条帛、裙、腰布、腕釧を着ける。左肩背面に垂下する条帛の末端を表す。像後方に向かって裙の折り返しが上方に翻る。正面を向いて台座上に立つ。

【品質構造】 針葉樹材（ヒノキか）。一木造。彫眼。彩色か。頭体幹部を一材から彫出する。後頭部から裙裾までを背板風に割り短ぎ、頭部と体部を通して内割りを施す。両肩以下、右大腿部側面各別材。両肩以下は両臂で短ぐ。右大腿部側面はヒノキと思われる針葉樹材。鉄釘、木釘で留める。黒漆をかける。もとは彩色像か。

（二）所見

堂内向かって左側に独尊で祀られる不動明王立像。

裳裾にみられる繊細な衣文線や、側面観でやや量感を落とした体軀表現、緻密な内割り等から、制作年代は平安時代後期—十二世紀頃と推定した。中央作と遜色ない造形は県下でも注目すべき作例と

いえる。

『新熊本市史』⁽⁵⁾によれば、本像は昭和五四年（一九七九）に熊本市西区高橋に所在する聖徳寺本堂（以下、高橋聖徳寺）から移動したものである。以前の伝来については詳細不明だが、高橋聖徳寺は応徳二年（一〇八五）に比叡山の僧・良快坊が肥後に下向して開基したと言われており、平安時代からの古刹と伝わる点は興味深い。同寺の調査と併せて今後の課題としたい。

五 木造男神坐像（中央壇） 一 軀

（一）概要

【法量（cm）】

像高 二六・四 頭頂―顎 一一・一

面長 七・四 面張 五・五

面奥（現状）八・二 耳張 七・〇

耳朶張 六・六 肩張 一五・六

胸奥（中央）八・一 臂張 一五・五

腹奥 八・六 膝張 一九・〇

膝高（右）六・八 膝高（左）六・六

裳先奥 一四・一 最大幅 一九・九

【形状】男神坐像。巾子冠。目を見開く。鼻孔を浅く穿つ。髭墨彩。閉口。耳孔を浅く穿つ。腹前で持物（亡失）を執る。袍、袴を着ける。正面を向いて坐す（足先を隠す）。

【品質構造】広葉樹材（クスノキか）。一木造。彫眼。彩色。像の

全容を一材から彫出する。内刻りを施さない。木心は像右前方に籠める。一部彩色が残る。

【保存状態】冠の先端亡失。持物亡失。

六 木造男神坐像（向かって右壇） 一 軀

（一）概要

【法量（cm）】

像高 三〇・四 冠下高 二三・七

頭頂―顎 一五・五 髪際―顎 七・六

面張 五・七 面奥（現状）八・二

耳張 六・五 肩張 一三・八

胸奥（中央）七・八 臂張 一六・七

腹奥 一三・六 袖張 一五・七

裾張 一三・八 最大奥 一四・〇

【形状】男神坐像。巾子冠。巾子を簪で留める（左の簪は亡失）。目を見開く。鼻孔を穿つ。閉口。両手は正面で右手を前に重ね、尺（亡失）を執る手制とする。内衣（右前に打ち合わせる）、袍、袴を着ける。沓を履く。正面を向いて右足を外にして坐す。

【品質構造】広葉樹材（クスノキか）。一木造。彫眼。彩色。像の全容を一材から彫出する。内刻りを施さない。木心は像中央に籠める。一部彩色が残る。

【保存状態】左袖先欠失。簪（左）、持物亡失。

七 木造男神坐像（向かつて左壇） 一軀

（一）概要

【法量（cm）】

像高	二六・六	髮際—顎	一〇・四
面長	六・九	面張	五・一
面奥（現状）	八・五	耳張	七・一
肩張	一五・五	胸奥（中央）	八・九
臂張	一六・四	腹奥	九・二
膝張	一八・六	膝高（右）	六・三
膝高（左）	六・六	足先奥	一五・七
最大幅	二〇・五		

【形状】男神坐像。巾子冠。目を見開く。鼻孔を浅く穿つ。髭墨彩。閉口。耳孔を浅く穿つ。腹前で持物（亡失）を執る。內衣（右前に打ち合わせる）、袍、袴を着ける。正面を向いて左足を外にしておて坐す。

【品質構造】広葉樹材（クスノキ材か）。一木造。彫眼。彩色。像の全容を一材から彫出する。内割りを施さない。木心は像右方に外す。一部彩色が残る。

【保存状態】冠の先端、持物亡失。

（二）所見

男神坐像（五く七）は、「権現神」と伝わるほか詳細は不明である。制作年代は三軀とも江戸時代と推定される。

三の嶽は「権現山」とも称され、山頂には権現宮が所在する。元禄二年成立の『肥後名勝略記』によれば、三の嶽には熊野権現社があったという。

また、二の嶽・三の嶽東麓には、天台宗総本山比叡山延暦寺の鎮守神である山王権現（日吉権現）を祀る大多尾日吉神社が所在し、聖徳寺と関わりが深いという⁶⁾。同社には明和九年（一七七二）銘のある彦山参詣記念の奉納石灯笼竿石が残されており、近世にも盛んに修業が行われていた様子が窺える。

八 木造聖徳太子立像 一軀

（一）概要

【法量（cm）】

像高	四五・二	髮際高	四〇・七
頭頂—顎	九・〇	髮際—顎	六・一
面張	五・四	面奥（現状）	七・三
耳張（角髪含）	八・六	肩張	一六・五
胸奥（中央）	一〇・四	臂張	一七・八
腹奥	一〇・一	袖張	一五・七
裾張	一三・八	最大奥	一四・〇

【形状】聖徳太子立像（孝養像）。頭髮を正面で左右に振り分け、角髪を結う。顎の括りを表す。右手屈臂して胸前に挙げ柄香炉を執る。左手屈臂して五指を伸ばし右手の下に添える。袍、袈裟、裙を着ける。沓を履く。ややうつむき、両足を揃えて厨子内の台座上に

立つ。

【品質構造】材不明。寄木造。玉眼。紙貼。彩色。頭体別材、差首。頭部は前後二材を面部で矧ぐ。体部は彩色に覆われ構造の詳細は不明。像底からの観察によると、体幹部は一材で彫出し、内割りして背板を矧ぎ足すか。両手首先、両足先（亡失）各別材。

【保存状態】鼻先欠失。両足先亡失。

（二）所見

伝来については不明。聖徳寺が聖徳太子開基と伝わることに関係する遺品であろう。制作年代は江戸時代と推定される。

本文註

（１） 三の嶽聖徳寺奥の院についての先行研究は、主に以下のようなものがある。

「木造聖観音立像」解説『第五回 熊本的美術展 中世の美術』展覧会図録（熊本県立美術館、一九八〇年）、『新熊本市史 通史編 第二卷 中世』（熊本市、一九九八年）、『第八回 九州山岳霊場遺跡研究会 肥後の山岳霊場遺跡―池辺寺と阿蘇山を中心に―資料集』（九州山岳霊場遺跡研究会、二〇一八年）

（２） 調査は以下の通り実施した。

【日程】令和七年（二〇二五）七月二十九日（火）

【場所】熊本市西区 三の嶽聖徳寺奥の院

【参加者（調査時の所属）※敬称略】有木芳隆（公益財団法人永青文

庫）、中西真美子（熊本県文化財保護審議会）、萬納恵介（熊本県立美術館）、宮田大樹（福岡市美術館）、奥島正興（九州大学大学院）、森瑞穂（大津市歴史博物館）、竹原明理（熊本県文化課 ※熊本博物館から派遣）、丸山大輝（熊本県文化課）、松永直輝、佐藤理恵（以上、熊本市文化財課）、木山貴満、坂本直也（以上、熊本博物館）、村上幸奈（熊本博物館 ※熊本県文化課から派遣）

（３） 大倉隆二「中世熊本の寺社と信仰 仏神像と石造物（金石遺物）」『新熊本市史 通史編 第二卷 中世』（熊本市、一九九八年）

（４） 有木芳隆「肥後の山岳信仰と中世仏神像―金峰山系と阿蘇山系の造像を中心に―」註１『肥後の山岳霊場遺跡』

（５） 註１『新熊本市史 通史編 第二卷 中世』

（６） 註１『新熊本市史 通史編 第二卷 中世』

図版 本稿に使用した図版は、熊本県立美術館、熊本博物館が撮影した。

謝辞 調査の実施及び本稿の執筆にあたり、聖徳寺様から御高配を賜りました。また、前述の調査参加者に御協力・御助言を頂きました。末尾ではございですが、記して感謝申し上げます。

図版

一 木造観音菩薩立像



二 木造不動明王立像（脇侍）



三 木造毘沙門天立像（脇侍）



四 木造不動明王立像（独尊）





五 木造男神坐像（中央壇）



六 木造男神坐像（向かって右壇）



七 木造男神坐像（向かって左壇）



八 木造聖徳太子立像

